

第1日 返り点・送りがな・書き下し文

■解答

- 1 (1) 8下 4レ 3ニ 2 7中 5 6上
 (2) 6ニ 1 5レ 4ニ 2 3
 (3) 8下 4ニ 5 2 1 3 7中 6
 (4) 1 12中 2 9下 5ニ 3 4 8中 6 7上 10 11中
- 2 (1) 5下 2ニ 3 1 4上 6
 (2) 6ニ 1 5下 4ニ 2 3
 (3) 7下 4レ 3ニ 1 2ニ 6中 5
 (4) 10中 1 9中 7下 5ニ 2 4レ 3 6上 8中
- 3 (1) 戒ニ兇輩弗ニ玩ニ蟬蝶鳥雀ニ
 (2) 至ニ阮籍所ニ以居ニ母喪ニ
 (3) 必祭ニ其所ニ以之ニ与ニ其所ニ以為ニ
 (4) 各以ニ絶句ニ相ニ報ニ答之ニ
 (5) 初不下以ニ家産有無ニ介意ニ
 (6) 君不レ如レ借ニ之道ニ示以レ不レ得レ已也
- 4 (1) 飢多たる者は食を甘しとす。
 (2) 歩卒五千人を將ふる。
 (3) 神聖の君に遇ひ、其の道を行ふを得んと欲す。
 (5) (1) 忽ち言ふ、阿智と婚せんと欲すと。
 (2) 足下袁氏を破らんと欲せざるか。

- (5) 「昔から家の財産があるかないかを気にしなかった。」「不」はここでは「ず」と読み、助動詞にあたる語。
- (6) 「主君はこれに道を貸してやり、自分の態度を示す時にはやむを得ないのだということにしたほうがいい。」「也」はここでは「なり」と読み、助動詞にあたる。「如」はここでは「しか」と読み、動詞にあたるので、ひらがなに直さない。
- 4 (1) 「飢えた者は食べ物をうまいと思う。」送りがなの「エ」に注意。
 (2) 「歩兵五千人を率いる。」送りがなの「キ」に注意。
 (3) 「神聖なる君主に出会って、人としての道を行うことができるように願う。」1 2 で注意を促した形で、上下点を用いた形。「之」はここでは「の」と読み、助詞にあたる。
- 5 (1) 「すぐに言った、阿智と結婚しよう、と。」
 (2) 「あなたは袁氏を倒そうとは思わないのか。」「邪」は疑問の形(第14日)。
 (3) 「あの方は裁判が正しく行われていないのを知って、これに(馬を)与えたのです。」「耳」は限定の形(第7日)。
 (4) 「以前に述べた言葉にこだわって(結婚するのに)よい時期を失わせてはならない。」一二点の次に上下点を使わずに甲乙点を使う文。
 3 (3) 参照。「不可」は第11日参照。「令」は使役の形(第5日)。
 (5) 「その人が優れた賢者であるのを損なわなかったのは、改めることができたからだ。」
 (6) 「天下を愛することについては、あなたが自分の身を愛するほどのことがあるだろうか、いやありえない。」「乎」は反語の形(第14日)。

- (3) 公獄訟の正しからざるを知り、故に之に与へしのみ。
 (4) 前書を執守して其の時節を挫失せしむべからざるなり。
 (5) 其の卒に大賢たるを害せざるは、其の能く改むるが為なり。
 (6) 天下を愛する者、君の身を愛するがごとき者有らんや。

■解答の解説

- 1 (2)の形に注意。ㄇ点の原則はレ点を先にすること。ここではㄇ点の下が一二点の「三」なので、末尾の「一」まで行って「二」へ返り、レ点で一つ上に返ってから一二点に従う。
 2 ここでも(2)の形に注意。
 3 (1)「子どもたちに、蟬・蝶・鳥・雀を軽視しないように言いつけた。」
 1 2 で注意した形。「弗」はここでは「ざる」と読み、助動詞にあたる。
 (2)「阮籍が母の喪に服す、その服し方のところまで(書物を読み進めて)来た。」「所以」に熟語棒を使う。
 (3)「必ず自分の到達する目標と自分がそれを成し遂げる方法とを明確にする。」一二点をはさんで返る場合は上下点を使うが、上下点は「上・中・下」の三つしかないで、それ以上に返る必要がある場合はこの文のように甲乙点を使う。「与」はここでは「と」と読み、助詞にあたる語。「之」はここでは「いたる」と読み、動詞にあたるので、ひらがなに直さない。
 (4)「それぞれが絶句を用いて互いに連絡しあった。」三字熟語に熟語棒を使う場合にはこの文のようにする。「之」はここでは「これ」と読み、代名詞にあたるので、ひらがなに直さない。

■今日の学習の解説

□ 返り点

- 3 上下点は「上・中・下」しかないで、それ以上返る必要がある場合は、上下点を用いずに甲乙点を使う。(3) (3) (5) (4) (4)
 4 5 「ㄇ点」「ㄷ点」は先にレ点に従い、次に一二点や上下点に従う。
 ○ 次の形に注意。

- 6 1 5 4 2 3 (1) (2) (2) (3) (1)
 8 3 1 2 7 6 4 5 (4) (3) ()

□ 書き下し文

ワ行の表記に注意 ろ→キ ゑ→エ を→ヲ (4) (1) (2) ()